



Kobe Shoin Women's University Repository

Title	いくさがたりの語り手 —『平家物語』壇浦合戦談を読む— The Reporter of Tales of Heike - the Case of Naval Battle at Dannoura -
Author(s)	信太 周 (SHIDA Itaru)
Citation	文林 (BUNRIN), No.37 : 11-28
Issue Date	2003
Resource Type	Bulletin Paper / 紀要論文
Resource Version	
URL	
Right	
Additional Information	

いくさがたりの語り手

—『平家物語』壇浦合戦談を読む—

信 太 周

平維盛・資盛兄弟の消息

平安末期から鎌倉初期にかけての政治情勢の究明にかかわって根本史料たる『玉葉』記事の一節、

この日、中御門大納言来らる。伝へ聞く、平氏讃岐の八島に帰住す。その勢三千騎許りと云々。渡さるる首の中、
教経に於ては一定現存すと云々。又維盛卿三十艘許り相卒し南海を指し去り了んぬと云々。又聞く、資盛貞能等、
豊後の住人等のため生きながら取られ了んぬと云々。この説日米風聞すと雖も、人信受せざる処、事已に実説と
云々。(寿永三年二月十九日条。高橋貞一『訓読玉葉』高科書店刊による)
が目立つ。

ここに言う「中御門大納言」とは、内大臣宗能の一男、藤原宗家のこと(高橋貞一傍注)、彼のもたらした最前七日の一の谷合戦の後日談をそのまま記述したという体裁である。敗北した平家の残党の消息が人々の関心事であり、

またこの種情報の行き交っていたさまがうかがえるというものの、ほとぼりさめぬまま、八末の刻中御門大納言（宗家）、宰相中将（定能）来たる。各これに謁す。或人云はく、平氏伐たれたんぬと云々。或は又生け取り、或は又土佐国に引籠ると云々。近日かくの如き説縦横、一定を存じ難きか（『玉葉』寿永三年三月十六日条）とも記し留めている。

『平家物語』における歴史そのままと歴史ばなれとの課題に即して恰好の対象——合戦直後の情報とはいふ、それにしても、『玉葉』寿永三年二月十九日記事と『平家物語』の展開とは齟齬すること甚だしい。『玉葉』にあつて、一の谷合戦での討死は虚報とされたはずの教経を含め、平維盛・資盛兄弟、平貞能ともに、この寿永三年二月十九日以後その消息を伝える記事は見当らない。『玉葉』記事を以てして、あの華々しい、あるいは哀愁に充ちた場面の数々の再現はかなわぬということであろうか。

たとえば、資盛の消息——『平安時代史事典』（角川書店刊）には、

治承・寿永内乱では反平氏勢力の追討に活躍。一門都落ちののちも、兄維盛の離脱にもかかわらず一門と行動をともにした。文治元年三月二十四日、壇ノ浦の合戦で戦死。叔母建礼門院徳子のもとに仕えていた女房建礼門院・右京大夫との恋愛はよく知られている。（野口実「平資盛」）

と記す。項目末尾「史料」欄に、『愚管抄』（五）及び、『吾妻鏡』（元暦元年二月五日、文治元年三月二十四日、四月十一日条）と掲げるが、『愚管抄』には、『平家物語』でも著名な挿話、嘉応二年出来の殿下乗合事件のきっかけとなる人物として名を留めるのみ、八治承・寿永の内乱では反平氏勢力の追討に活躍云々／の論拠たりえない。

確かに、『吾妻鏡』には、『平家物語』をなぞるかのごとき、資盛の三草山合戦参戦、また、壇の浦合戦の終末、

△新三位中将資盛、前少将有盛朝臣等、同じく水に没す云々▽（貴志正造『全譯吾妻鏡』新人物往來社刊による）との裏付けのあることではあるが、『玉葉』記事の史料批判を果していないとの誇りまぬかれまい。事実、「史料としての『平家物語』（『文学』平成14年7・8月）など『平家物語』が史料として有用なる所以を説く上横手雅敬にして、『玉葉』寿永三年二月十九日条を重視、

まず資盛は、通説では壇の浦で討死したとされているが、そうではなしに豊後の武士に捕らえられたという。和平工作の中心で、緒方氏と親しかった資盛は、おそらく緒方氏に降り、屋島には赴かず、豊後に留まったのであろう。そして維盛も『平家物語』にあるように、都に残した妻子に会うため、三人の従者を連れてひそかに屋島を脱け出したのではなく、三十艘の船団を率いて堂々と分派行動に出たのである。これらの説を、人は信じなかったが、『玉葉』は自信をもって実説だと記している。（『源平争乱と地域史』、『源平争乱と平家物語』所収、角川書店刊、平成13年）

と評価しているほどである。

歴史物語たる『平家物語』をなぞるだけとの引け目なく、歴史記述を果すことは出来ないものか——資盛の愛人建礼門院右京大夫の手記とも言うべき『建礼門院右京大夫集』の愁嘆場、資盛の悲報に接した折の回想、

又の年の春ぞ、まことにこの世のほか聞き果てにし。そのほどのことは、ましてなにかいはむ。みなかねて思ひしことなれど、ただほればれとのみおぼゆ。あまりにせきやらぬ涙も、かつは見る人もつつまじければ、なにとか人も思ふらめど、「心ちのわびしき」とて、引き被き寝暮してのみぞ、心のままに泣き過ぐす。（略）ただ

「かぎりある命にてはかなく」など聞きしことをだにこそ、かなしきことにいひ思へ、これは、なにをかためしにせむと、かへすがへすおぼえて云々。(糸賀きみ江校注『新潮日本古典集成 建礼門院右京大夫集』)

のくだりは、史料としても有用である。この前段、△また、「維盛の三位中将、熊野にて身を投げて」、人のいひあはれがりし云々△を承けての△又の年の春△であれば、それと明らかに告げている訳ではないが、不慮の死を暗示しているあたりも含めて、資盛の閱歴を、△文治元年三月二十四日、壇ノ浦の合戦で戦死△(『平安時代史事典』)と結ぶのは理のあるところであろう。ちなみに、流布本等で入水と描かれているはずが、延慶本では△敵ニ被取籠ケル所ニテ、自害シテ失給ヌ△と『平家物語』諸本で一定しない。それにしても、一の谷合戦直後の風聞△資盛貞能等、豊後の住人等のため生きながら取られ了ぬと云々△(『玉葉』)の不可解さ、九条兼実は、この情報を心底信じきっていたのであろうか、後日糺すこともしていない。

当事者とも言うべき建礼門院右京大夫がそれと信じ納得していたこと——△維盛の三位中将、熊野にて身を投げて云々△と記す維盛の最期も、『平安時代史事典』『平維盛』の項によれば、

寿永二年五月、木曾義仲の軍に俱利伽羅峠で惨敗し、同年七月、一門とともに西海に逃れたが、元暦元年二月、一門を離脱、その後は、高野山に赴いて出家を遂げ、熊野那智で入水したとも、源頼朝を頼って東下の途中病死したとも伝える。(野口実担当)

と諸説入り乱れているあたり興味深い。上横手雅敬は、ここでも、

維盛の脱走には、末弟の忠房も同行していたとみられる。(略)しかし、屋島を脱出してからの行動は、維盛と

忠房とは異なっていた。『源平盛衰記』巻四十に引く『禪中記』によれば、維盛は『平家物語』にあるように那智で入水したのではなく、熊野に参詣して後、都に上って法皇に助命を乞うた。法皇が頼朝に伝えたところ、頼朝が維盛の関東下向を望んだので、鎌倉に下向する途中、維盛は相模国（神奈川県）湯下宿で病没したとする。『禪中記』のこの部分は現存しないが、この日記は権中納言葉室長方によるもので、信頼できると思われる。

（『源平争乱と地域史』、『源平争乱と平家物語』所収）

など、建礼門院右京大夫の回想との確固たる裏付けのある『平家物語』に展開する維盛最期談を退けている。

ことは、『禪中記』記事の信憑性の吟味いかん——『平家物語』の出版考察にあたり、『禪中記』に着目した嚆矢、後藤丹治は、

源平盛衰記巻四十、中将入道入水の条中に異説をあげて、禪中記といふ書を引いてゐる。（略）一体、前記の盛衰記の或説といふのは平維盛が熊野の沖で入水したと云ふ通説に対して、実は入水したのではないとの異聞を録したものである。維盛が熊野で入水したと云ふ風聞が京都に行はれてゐたことは、建礼門院右京大夫集にも見えてゐるが、それは恐らくは風聞に過ぎないのであつて、實際は盛衰記所載の或説の如く相模国で餓死したのではあるまいか。その或説に維盛が法皇に助命を乞ひ奉つたとあるところを見ると、堂上側近の臣である藤原長方は、自然にそれ等の事情を知悉し、その日記禪中記に書き留めておいたものであらうと思はれる。かう推定するのは決して穩当を欠くものではないと信ずる。（『平家物語出典考』、『改訂増補戦記物語の研究』所収、大学堂書店刊、昭和47年再版）

と考証していることであつた。

『禪中記』残闕本に当該記事を見出しえないのは措くとして、『源平盛衰記』卷四十に展開する維盛入水談に、
 〽或説に云〽以下当の年月日を示すこともなく、
 〽頼朝御返事に、彼卿を下し給て、体に随て可申入と申たりければ、可罷下由法皇より被仰下ける。後は飲食を断たりけるが、廿一日と云けるに、関東へも下著せず、相模国湯下宿にて入滅ともいへり。禪中記に見えたり〽（国民文庫刊行会本）と付された態の注記をして、建礼門院右京大夫の回想よりも史料としての信憑性ありとすることにどの程度の蓋然性があるといふのであろうか。『源平盛衰記』には、今一簡条、

或説には、那智の客僧等是を憐て、瀧奥の山中に、庵室を造りて隠し置たり。其所今は広き畑と成て、彼人の子孫繁昌しておはす。毎年に香を一荷、那智へ備ふる外は、別の公事なし。故に爰を香膠と云と、入海は偽事と云云。

と記す。史料の裏付けもない伝承ではあるうが、現在、和歌山県東牟婁郡那智勝浦町色川、同日高郡龍神村小森谷、奈良県吉野郡十津川村五百瀬、同野迫川村が維盛の隠棲を伝える由（二本松康宏「平家伝説と遺跡」、『国文学』平成14年10月）、『源平盛衰記』異説に繋がる遺跡ということであらうか。

史実考証——俊寛の悲劇談

平維盛・資盛兄弟の最期にかかわって、史書たる『玉葉』や『禪中記』よりも、『平家物語』の方が真相を伝えて

いるのではないか——『平家物語』に描き出された俊寛の悲劇談をめぐり、△伝説の歴史性、もしくは史料としての伝説の価値といふものを、もう久しい前から私は考へて見ようとして居る▽と書き出す柳田國男「有王と俊寛僧都」『定本柳田國男集』第七卷所収、筑摩書房刊）の追究もここに尽きる。

ところで、柳田國男をして、△有王が戻つて語らぬ限り、誰がこの悲愴なる最後の光景の、曾て此世に出現したことを知る者があらう。（略）私はこの名譽多き一篇の文学に、隠れて有王の参加して居ることを疑はぬのである▽と感嘆させた俊寛の悲劇談につき、いざこの事件の全容を史料により裏付けようとする就容易ではない。確かに、鹿谷事件なる謀反が露見したことは明白な事実、『史料綜覧』（東京大学出版会刊）から関連事項を摘記すると次の通り。

治承元年六月一日 平清盛、権大納言藤原成親、右近衛少将同成経、及び前左衛門尉師光ヲ八条第二捕フ。（玉葉、愚管抄、参考源平盛衰記等）

同二日 藤原成親ヲ備前ニ流シ、同師光ヲ殺ス。（玉葉、愚管抄、参考源平盛衰記等）

同三日 平清盛、法勝寺執行権少僧都俊寛、山城守中原基兼、檢非違使左衛門尉惟宗信房、同平佐行、同平康頼等ヲ捕フ。（玉葉等）

是月 平清盛、藤原成経、平康頼、俊寛ヲ鬼界島ニ流ス。（愚管抄、参考源平盛衰記等）

七月九日 平清盛、藤原成親ヲ備前ニ殺サシム。（顯広王記、百練抄、参考源平盛衰記等）

治承二年七月三日 天下ニ大赦シ、流人藤原成経、平康頼ヲ召還ス。（参考源平盛衰記、保曆間記、宝物集等）

治承三年九月 是月、流人前法勝寺執行俊寛、鬼界島ニ寂ス。（参考源平盛衰記、高野春秋）

日次の記とあれば、種々記事が混在するのは当然のこと、それにしても、『玉葉』記事からは、鹿谷事件のあらまし断片的にはうかがえるものの、『平家物語』に展開するような俊寛の悲劇談の復元まではかなわない。鹿谷事件にかかわる俊寛の動靜については、僅かに、

人伝に云はく、去俊亥の刻、入道の許に、搦め召す輩六人と云々、法勝寺の執行僧都俊寛、(略)同平康頼、已上法皇の近習の輩なり。各前庭に渡しこれを見ると云々。(安元三年六月四日条)
と記すのみである。

この点、『愚管抄』(卷五)は、後白河法皇側近の企んだ謀反鹿谷事件を詳細に伝え、
法勝寺執行俊寛ト云者、僧都ニナシタビナドシテ有ケルガ、アマリニ平家ノ世ノママナルヲウラムカニクムカ、
叡慮ヲイカニ見ケルニカシテ、東山辺ニ鹿谷ト云所ニ靜憲法印トテ、法勝寺ノ前執行(略)イササカ山莊ヲ造リ
タリケル所へ御幸ノナリシケル。コノ閑所ニテ御幸ノ次ニ、成親・西光・俊寛ナド聚リテ、ヤウノ議ヲ
シケルト云事ノ聞エケル。

以下、多田藏人行綱の密告による、西光法師の逮捕、惨殺、さらには成親の逮捕、配流、殺害の記事に及び、俊寛ト検非違使康頼トヲバ硫黄島ト云所ヘヤリテ、カシコニテ又俊寛ハ死ニケリ(『日本古典文学大系 愚管抄』岩波書店刊による)と結ぶ。慈円の鹿谷事件に寄せる異様なほどの関心の深さが見てとれるとは言うものの、あの柳田國男をして感嘆させた『平家物語』に展開する俊寛の悲劇談の趣とはやや様相を異にすることは否めない。この点に触れ、かつて、

『平家物語』では、流罪に処せられた三人のうち俊寛だけが赦免に漏れて、侍童有王が島に渡り俊寛の最期を見届けるという悲劇談を展開している。俊寛の山荘を陰謀の場として提供したこと、最後まで清盛の怒りが解けず一人島に残されるという設定であるが、『愚管抄』では静憲法印の山荘での密議となっているなど、『平家物語』における俊寛の悲劇談を全て事実談とするわけにはいかない。（『俊寛』、『平安時代史事典』）と指摘したことである。

『平家物語』に展開する、俊寛を島に残したまま赦免により帰還するという数奇なる運命をたどった二人——なかで平康頼はその著『宝物集』冒頭で、

治承元年の秋、薩摩国の島を出て、おなじき二年の春、二たび旧里にかへりて侍りしかども、世の中も有りしに
もあらず、浮木に乗りけん人の心地せしかば、世の憂き時の住家なれば、心をもなぐさめむとて、東山なる所に
籠り居て侍る程に云々。（山田昭全校注『新日本古典文学大系 宝物集』岩波書店刊による）
と回想している。

もっとも、『平家物語』に展開する赦免使の鬼界島到着は治承二年九月二十日頃のこと、康頼・成経の鳥羽到着は翌三年三月十六日と設定されていることであった。『宝物集』に言う治承二年春の帰還では、建礼門院の懷妊による恩赦とのからくりは成り立たず、と言って、△治承元年の秋▽△おなじき二年の春▽につき、それぞれ、

治承二年の誤りか。あるいは錯覚による混乱か。康頼は安元三年六月三日に鹿ヶ谷事件で逮捕され、鬼界が島に流される（玉葉）。安元三年は八月四日に改元して治承元年となる。高倉天皇中宮徳子の御産の特赦で赦免され

たとすれば、島を出たのは二年、帰路は三年春（平家物語）とするのが穩当。

治承三年春とあるべきところ。（山田昭全脚注）

と調整をはかるのは、当事者の証言を物語の記述に合わせて安易に訂正していいのかとの不審まぬかれまい。建仁三年三月十九日条、参議正三位藤原成経薨去記事に触れて、『大日本史料』は『公卿補任』を引くが、

安元三年六月十八日、解却所帯両官、依父縁坐赴遠島也、年月日帰京。

と帰還の年月を明示していない。これまた『平家物語』における歴史そのままと歴史はなれの恰好の対象たることは明らかである。

過ぎし流人生活につき康頼はほとんど語ることはないが、今一箇所、

三ヶ年の夢、わづかに覚めたりといへども、一生涯の歎、いまだ晴ざる程なれば、人にもしられで侍るに、いかにして尋ねては来り給へるぞ。鬼界が島の有様は、申しても無益と侍るべし。故郷の事、風の伝にも聞難く侍りき。都を出て後、如何なる事か侍りし云々。（『宝物集』巻一）

の△△三ヶ年の夢△△も議論を呼ぶところ、冒頭の回想とは辻褃合わないが、山田昭全は、△△三年にわたってみた悪夢。安元三年の流罪から治承三年の帰洛までは足かけ三年となる△△との注を付している。ただし、配流三年は表現の定型——謡曲「松風」の△△かくて三年も過ぎ行けば、行平都に上り給ひ△△の注、△△行平の須磨配流の期間所見なし。「三年」は光源氏の謫居を重ねた脚色か△△（伊藤正義校注『新潮日本古典集成 謡曲集』）等を思い合わせればよい。

なお、『平家物語』俊寛の悲劇談の展開にあって、俊寛の有王に対する述懐のなかに、△△心にまかせたる俊寛が身

ならば、何とて此島にて三とせの春秋をば送るべき▽（巻三「僧都死去」）と△三とせの春秋▽が強調されている。確かに、△この有王の島下りを、治承三年三月末都を出、初夏の頃島へ渡り着いたとすると、安元三年六月の配流から数えて足かけ三年になる▽（梶原正昭・山下宏明校注『新日本古典文学大系 平家物語』岩波書店刊、脚注）と合理的説明の可能なところであろうが、それにしても俊寛の悲劇談の感動は、配流三年の定型による脚色か、あるいは事実談そのままの再現によりもたらされたものかの検討は課題として残る。

俊寛の悲劇談の語り手

次々に紡ぎ出される流麗な行文、加えて多岐にわたる切り口と、柳田國男「有王と俊寛僧都」の論旨をたどるのは容易なことではない。それにしても、開巻、

伝説の歴史性、もしくは史料としての伝説の価値といふものを、もう久しい前から考へて見ようとして居る。はその手頃な一つの実例であるが、何分にも知識がまだ乏しくて、安全な結論に達することが出来ない。単に斯ういふ方法も有るといふことを述べて、文学史家の批判を受けて見たいのである。俊寛僧都の墓所といふものが、諸国には数多く保存せられて居る。是と平家物語の鬼界島の一条とは、どういふ関係に在るのであらうかを最初に問題にして見る。

と語り出す△伝説▽とは何を指していたのであろうか。全七節から成る論考、第一・二節に繰り返す、△全国の多くの遺迹を繋ぐものも、同じく又有王といふ侍童の旅行だったのである▽△有王が戻つて語らぬ限り、誰がこの悲愴な

る最後の光景の、曾て此世に出現したことを知る者があらう／＼斯ういふ情景までが世に伝はつて居るのは、いつの間にか有王が主人から承はつて居たのである。さうでなければ他にもう知る者の無いことが多いのである／＼等からは、俊寛の悲劇談をして事実談とせずにはおかぬとの氣迫が察せられる。

俊寛は實在の人物として、有王もまた實在の侍童とする確証のないこと——第三節以下、／＼有王はつまり色々の奇抜な物語、殊に死霊の執着といふ類の不思議を、語つてあるく法師の代々の通り名だつたかも知れぬからである／＼等、高野聖有王による俊寛の悲劇談の流布に話題は転ずる。『平家物語』卷三「有王島下」は、

有王は俊寛僧都の遺骨を頸にかけ、高野へ上り、奥の院に納めつつ、蓮華谷にて法師になり、諸国七道修業して、主の後世をぞ弔ひける。(流布本)

と俊寛の悲劇談を結ぶが、柳田國男の説く／＼伝説の歴史性、もしくは史料としての伝説の価値／＼究明の関心はこの一文を実証することの方にあつたのであろうか。

もちろん、『平家物語』の異文の甚だしき、この俊寛の悲劇談の末尾も、／＼遺骨を首にかけた姿、奥の院への納骨、蓮華谷聖等、有王の記事は高野聖の特徴を備えており、延慶本などではより詳しいが、四部本は嵯峨で出家とする／＼(佐伯真一他校注『三弥井古典文庫 平家物語 上』一七四頁頭注、平成6年)と一筋縄ではないが、五来重もまた柳田國男の問題提起を継承、「高野聖の文学」の章を特立して、／＼俊寛有王伝説には、これを語りあるいた高野聖の足跡をみる事ができる云々／＼(『増補高野聖』角川書店刊、昭和50年)など俊寛有王にかかわる遺跡を紹介していることであつた。

ちなみに、この種遺跡についての記事を江戸期地誌類から一二摘記してみると次の通り。

長崎の津より西南五里の海路に、いわう島とて東西にながくわたりて島山あり。(略)一説に俊寛法師の配流せる所は此いわう島なり。異本の平家物語に、彼杵郡のいわう島なるよし見えたりとかや。予いまだ其異本を見ざれば、募りていひがたし。(略)此島の東深堀といふ地に、有王塚とて塚有といふも、なをいぶかし云々。(西川正休『長崎夜話草』。享保五年跋。岩波文庫本による)

在王塚 在王丸と云は、俊寛僧都の扈從にて僧都左遷の時、京に残れり。後主人を慕ひ遙々と薩摩瀧へ趣、伝を以鬼界が島へ渡れり。島にて主人を尋れども知れず。因て神明仏陀に祈誓して主人に廻り逢事を嘆しに、夢中に僧都に対面し越方の物語りせしに、松吹風と諸共に夢覺たり。其傍に觸轡ありける故、是こそ主人の無き骸と取収て京へ帰れり。殷勤に追福を執行せり。其後在王丸関東へ下る時桑名の浜辺にて休息せしに、空中よりの示現に、行がたき御法の船のみなれ棹ささでも渡る彼の岸べにぞ。不思議の思ひをなし、傍なる臨湊寺の本尊前にて通夜の勤行せられしが、時節の到しにや、病無して正念命終せり。寺僧其外の人々よりそい、筵席を蓋て一夜を越せしに、夜中薦の隙間より光明かがやき、靈瑞殊勝なり。寺の傍に葬と云。葬し処此地なるべし。(義道『久波奈名所図会』。文化元年刊。久波奈古典刊行会本による)

僧都宅地並僧都川 知識村、西目の脇本にあり。往古俊寛僧都喜界島より帰洛せんと欲し、此地に來りしとて、僧都宅址を伝へ、側の井を僧都川といふ。隣邑野田に僧都墓あり。(五代秀堯・橋口兼柄『三国名勝図会』。天保十四年刊)

柳田國男や五来重が俊寛有王伝承の分布例として掲げる、長崎西方の伊王島、伊勢桑名郡益生村、薩摩出水郡下出水村脇元の遺跡についてのそれぞれの言い伝えである。それにしても多様な展開——柳田國男は、△たとへ近世に入ってから、□碑を取上げて筆にしたものにもせよ、種無しには斯ういふ話は浮んで来ないだらう▽と論ずるところであるが、俊寛の悲劇談を語り歩いた高野聖の足跡と見る等をして自明の理とするだけの事実の検証と言うには程遠い。

壇浦合戦談の語り手

源平合戦の終結、壇の浦合戦の古戦場たる下関では、能登守教経の最期につき、△『平家物語』に▽として、△能登殿（略）安芸の太郎をば弓手の脇にかい挟み弟の次郎をば馬手の脇に取りて挟み、一しめしめて、いざうれ、己等死出の山の供せよとて生年廿六にして海へづとぞ入り給ふ▽を引き、また、新中納言知盛については、△『源平盛衰記』に▽として、△知盛卿（略）平中納言教盛卿と胄脱捨てて西に向ひ念仏申して兩人自害せられければ云々▽と引いてその最期を説く（『下関市史 原始——中世』下関市役所刊、昭和43年）。歴史物語とは言え、物語を以て歴史叙述にかえることができるのかとの危惧は措くとして、同じく壇の浦合戦を描くのになぜ依拠本文を替えるのかは不審、加えて、長門国赤間関阿弥陀寺蔵書たる長門本『平家物語』や同寺の絵解き（「長州赤間関阿弥陀寺御絵解書」、『絵解き台本集』所収、三弥井書店刊）では、教経・知盛ともに入水とするなどの食い違いは当の下関市民の話題にならなかったであろうか。

『平家物語』にあって、△大將軍には新中納言知盛卿、副將軍には能登盛教経なり。（略）平家は今度水島の軍に

勝つてこそ、会稽の恥をば雪めけれ▽（巻八「水島合戦」）等この勇者二人の取合せは印象深い。壇の浦合戦でも、
△人々は鎧の上に重き物を負うたり抱いたりして入ればこそ沈め、この人親子はさもし給はず。なまじひに水練の上
手にておはしければ、大臣殿は右衛門督沈まば我も沈まん、助からば我も共に助からんと思ひ、互に目を見かはして
かなたこなたへ泳ぎありき給ひける云々▽と描かれる宗盛父子とは好対照、教経・知盛は最後まで奮戦して果てたと
称えられていること——もっとも、教経の最期については、一の谷合戦で討死（『吾妻鏡』）と壇の浦合戦で自害
（『醍醐雜事記』）等史料に齟齬がある。また『平家物語』諸本で一様にその最期を入水と記す教経と異なり、知盛の
死に様の描写にこだわると、『醍醐雜事記』に△自害▽と記されているものの、『源平盛衰記』は教経入水談のあと
△異説には自害云々▽と注記し、また、知盛については本文に△知盛卿余に嬉しげに思て、平中納言教盛卿と胄脱ぎ
捨て、西に向ひ念仏申て、兩人被「自害」ければ、有国家長已下侍八人同じ枕に自害して伏ぬ▽と記したあと、△一説
に云、知盛教盛兩人は、腹巻の上に鎧を著、身を重して手を取組み海に入り給ひければ、侍共八人、同続て入にけり
云々▽と異説を紹介するなど一様ではない。教経・知盛の最期談もまた、『平家物語』における歴史そのままと歴史
ばなれの究明一筋縄ではないところである（拙稿『醍醐雜事記』所載『平家物語』関連記事考）、関西軍記物語
研究会編『軍記物語の窓 第二集』所収、和泉書院刊、平成14年）。

他に、『平家物語』壇の浦合戦幕開きの一節、

さる程に源平両方陣を合す。陣の間、海的面纔に三十余町をぞ隔てたる。門司、赤間、壇浦は漲りて落つる潮な
れば、平家の船は心ならず、潮に向つて押落さる。源氏の船は自ら潮に追うてぞ出で来る。（流布本）

も議論を呼ぶところ——黑板勝美『義経伝』（創元社刊、昭和14年）等、この記事を手掛りに海流の変化こそ源氏の勝因と説くが、谷沢永一は、金指正三「壇の浦の潮流」（『海上社会史話』所収、成山堂刊、昭和46年）に着目、△金指はお得意の海洋資料と地球物理学を駆使して、合戦当日の水域では潮流の速さは一ノット以内、『平家物語』に「たぎつておつる潮」というのは実情を知らぬ者の誇張だと断定している。壇の浦の勝敗をきめたのは潮流でなく、無防備な平氏の漕手を、源氏が片っぱしから弓で倒したからだった。金指が苦勞して出したこの結論云々△とこれまでの△むちゃな推定△を手厳しく糾弾している（『壇の浦合戦の勝利』、『紙つぶて（全）』所収、文春文庫、昭和61年）。確かに、物語に拠って歴史を説くことの陥穽、△門司、赤間、壇浦は漲りて落つる潮なれば云々△は延慶本等には見出せない表現、これに対して、

源氏の兵ども、平家の船に乗り移りければ、水主楫取ども、或は射殺され、或は斬り殺されて、船を直すに及ばず、船底に皆倒れ伏しにけり。（流布本）

は諸本等しく述べるところ、歴史そのままと歴史ばなれに留まらず、『平家物語』異本論にも及ぶ課題であろう。

ところで、教経の弟仲快律師につき、『平家物語』に描く、兄通盛の妻小宰相の戒師を務めた云々（巻九「小宰相」）は真偽不明にしても、壇の浦合戦での生捕りや配流は史実に適うが、主にその後の仲快に焦点絞った伝記追跡にかかわる論が続いている。角田文衛『平家後抄』（朝日選書、昭和56年）と目下力『平家物語の誕生』（岩波書店刊、平成13年刊）——△大原に止住している間に、忠快は必ず一度ならず寂光院の建礼門院の許に参上したことであろう。言うまでもなく女院は、忠快のイトコであり、かつ壇ノ浦まで辛酸を共にした間柄であった△（『忠快僧都』、『平家後

抄」所収」等『平家物語』に語られざる世界への想い、あるいは、△同書（『源平闘諍録』）では、一谷で熊谷直実の討った相手が敦盛にあらずして、忠快の弟の業盛となっているが、それは、東国に縁深い忠快との連想から生み出された異伝ではなかったか云々▽（「一般世上と作品胎生の脈絡」）や△教盛の子孫たちも教子・忠快・重子と、その中に含まれていた。改めて、物語中の教盛には同情こそあれ、非難めかしい言辞は一つも向けられていなかったことの意味を問い直してみなければなるまい云々▽（「軍記物語の生成と展開」、以上ともに、『平家物語の誕生』所収）等『平家物語』成立時期の時代相と作品誕生のかかわりについての所論が目立つ。

なかで、論述の主眼を覚一本に据えたと明記した、刑部久「『平家物語』壇浦合戦譚に見るいくさ語りの完成」（山下宏明編『平家物語 研究と批評』所収、有精堂刊、平成8年）が、「忠快の戦場体験と語り」、「戦場体験の語り、その後退と整序」などの節を特立して、△忠快の視線▽や△忠快の意図▽等△忠快の語り▽に踏み込んでいるのは、柳田國男に始まる発想——『平家物語』に先行する平家語りの想定を受け継ぐものであろうか。ただし、その前提、

説経や教授や儀式あるいはそれ等に伴ったであろう雑談の場で、忠快（や増盛）は、一体何を語って曾ては敵であつた人々を引きつけ、その帰依や尊敬を得ることができたのか。（「忠快の戦場体験と語り」）

は、△宝幢院の本願いはく、「昔の上人は、一期、道心の有無を沙汰しき。次世の上人は、法文を相談す。当世の上人は、合戦物語」云々▽（『一言芳談』角川文庫本による）に照して、自明の理とするに疑念なしとはしない。この『一言芳談』の一文は、その前段△しかうして、その時まで、論義日記ばかりをばせしなり。当世は、それ程のことも無き歟▽を合わせ読むかぎり、末世の僧の墮落と読むべき箇所であらう。

なお、地誌『西撰大観』（仲彦三郎編。明輝社刊、明治44年）には、忠快律師をして兵庫能福寺の中興とする伝承のあることを記し、その遍歴のさまを、

扱て福原の故京に來れば昔なつかしき涙は一層胸に迫り、鶴越、一の谷、須磨、明石等処々の戦場を巡り其中にも兄の越前の三位、叔父本三位の中將、從弟の無官の太夫の事ども思ひ出して哀み身に沁みぬ。（略）日数重なりて長門の壇の浦に着し、（略）二位殿新中納言最後の有様、能登守の振舞ひ小松の子息達の鎧を下して海に入りし其當時を回顧すれば云々。（下巻、第七「古城址及古戦場」）

と述べて、△忠快語り▽の下地十分といった態である。しかし、これらの記述は正史に符号するところなく、また、教経の壇の浦合戦での戦死を記しながら、他に、

平教経塚 和田崎旧上海紡績の東土塀に沿ひ土封あり。伝へいふ能登守教経の墓なりと。又古地図にも此く標示せり。吾妻鏡に依れば、寿永三年二月七日但馬前司経正、能登守教経、備中守師盛は、遠江守義定の為に獲る所となれり。然るに平家物語、源平盛衰記等には、教経一の谷に死せず、屋島、壇の浦に奮闘せしことを載するも詳かならず。故に此地古來より教経の塚として存するをもて記すといふ。（下巻、第五「墳墓」）

との異伝を記載するなど面妖なことであるに違いない。

それにしても、実態定かでないまま、物語に先立つ平家語りを想定することが『平家物語』鑑賞にあつていかなる意義を有するのかは、改めて問われるべき事柄であらう。